第一章　この土地に移り住み、商いをして暮らしていたある夫婦がこの家を建てたのは、1958 年のことです。近所には小さな映画館もあります。そうして建てられたぴかぴかの木造 2 階建ての一軒家で、夫婦と孫娘との三人の生活が始まりました。寒い冬のその女の子の布団の中は、いつも湯たんぽでほかほかに温められていました。1960 年代の半ばに、女の子が東京の大学に進学すると、夫婦二人の丁寧な生活が少し続きます。

第二章　1970 年代に入りピアノが上手なお姉さんと、賢く足が速い弟の兄妹がこの土地に転校してきました。庭が広く小学校にも近いこの家をとても気に入った両親は、ここを借りることにします。兄妹は田んぼのあぜ道を通って通学しました。映画館はもうなくなっていますが、駄菓子屋やそろばん塾、お習字教室が近くにあり、兄妹の友達など子供たちがこの家を多く通ります。

第三章　1980 年代〜2011 年はとても静かな時間が流れています。そうして発見されるのを楽しみに待っています。はくびしんの親子は、短い期間ですが、2 階の部屋を住まいとしてくれました。１０代の女の子達の秘密の場所として選ばれ、ダンスの練習場となったこともあります。

第四章　2011 年 3 月 11 日の地震をきっかけに続く災害と事故は、静かに雨戸を何十年も閉め切ってきたこの家にも変化を与えます。町の人々の帰還を目指す住宅の除染作業が翌年から始まると、敷地をはみだし、思うがままに伸び、実を付ける柿の木や、元気な植物たちは根こそぎ撤去されました。敷地の裏の美しい水田は、手入れをする人を失い、草原の風貌を見せています。

第五章　2016 年、「縁側の家」が始まります。この家は、ほんの少しの修理を加えただけのこれまでと変わらない姿でここにいます。そしてピザ窯やアート作品を囲む訪問者らと共に愉快な気持ちでいます。

えいのわがんえ

縁側の家は、福島県浜通りにあるカルチュラル・プラットフォームです。
土地や境界、身体をテーマに活動をしています。

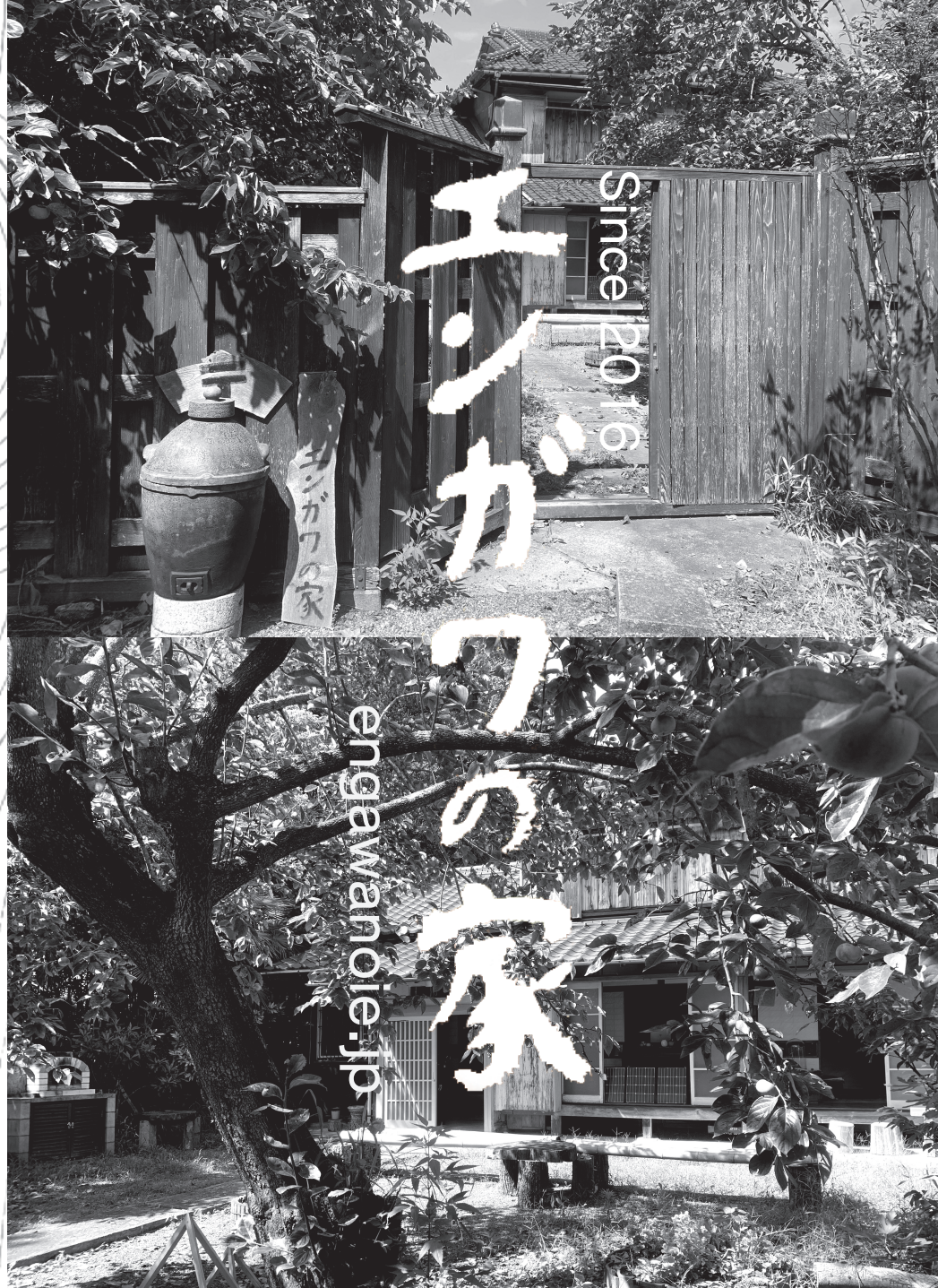
- イベント開催（「3 月 11 日に波に乗ろう」、コンサート、展覧会他）
- クリエーター & サーファー・イン・レジデンス、コミュニティスペース
- オリジナル作品制作（小説 静かな身体）

イベント情報（常設展あり）や見学のご連絡等は
QR コード（engawanoie.jp）をご覧ください。

主催：高橋優子（たかはし ゆうこ）

福島県双葉郡広野町生まれ。外国航路の船乗りの父と大らかな母の下、弟（ひでシェフ）と共にのびのび育つ。東京学芸大学大学院修士課程修了（音楽学）。ドイツ、オーストリアを経て、現在は東京（スイス）と広野町との２拠点生活。愛する仲間や家族・サーフィンでいっぱいの日々。

本展は研究課題「コンポスト・インクを用いたカタログを起点とした現代の環境問題に対するデザイン実践」（追手門学院大学個人研究費、松谷容作）との共催で実施されている。



常設展示「縁側にて」/ Exhibition “at Engawa”

《anitoya cursing skateboard》2022、2023
齊藤勇樹 (anitoya) / Yuki Saito (anitoya)
朴木 / magnolia（2022)、ホワイトアッシュ / White ash（2023）

生粋のスケーターであり現在はサーファーとして地元のいわき市を拠点に活動する齊藤は、板に乗ることで「自由」を表現します。地球から生み出されたエネルギーと生命を宿した「板」に乗ることで、地球とつながり、自由になれると齋藤は言います。材木の性質と木目が生かされた美しい流線形を描く本作品は、特注のかんなややすりで徹底的に磨き上げられており、自然が内包する強さや美を象徴しているようです。機能性にも優れており、本作品にはトラックとウィールを取り付けることが可能です。乗り手はその「板」に乗り､身を委ね､ゆったりと地球をクルーシングすることができます。素朴の意も持つ柔らかい朴木を使用した 2022 年の作品と、粘りのある硬さを持つホワイトアッシュを使用した 2023 年の作品は、どちらもまるで縁側の家の一部のようです。

《習作群 竹工芸 / Bamboo Crafts》 2016-
高橋 瑛 / Akira TAKAHASHI
真竹 / Madake - Japanese Timber Bamboo

縁側の家に隣接する竹藪は、その西の窓に美しい影を届けます。庭には丁寧に作られた竹垣があり、室内には各々の用途に適した編み模様の竹のカゴやザル、ランプシェードやオットマンにまで竹が登場します。それらは、生活のあらゆる道具（ピザ窯も含む）を当然に自ら制作する高橋（父）の作品群です。渓流釣りの季節が終わり秋になると、高橋は竹の伐採を始めます。油抜きや天日干しなどの下処理を経てようやく荒割り。何度も割を重ね整え、ヒゴを作る。そうして均等なヒゴができる頃に冬を迎えます。それで薪ストーブのある暖かな丸太小屋にこもり、竹を編んで冬を過ごすのです。これまでにカゴやザル、竹垣、藤棚、背負籠、農具、漁具等を制作。縁側の家の先代の孫娘で美術商（一番星画廊、東京）の熊谷正子は、高橋の妻・美智子と共に幼馴染の同級生。熊谷が縁側の家に暮らしていた当時、その隣家は紙漉き場でした。2 キロ離れた高橋の実家には和紙の原料となる楮の木があり、その枝を運んだ思い出も。

《　　鈴 / bell》 2013
三原 聡一郎 / Soichiro MIHARA
ガイガーミューラー計数管、ガラス、モータ、マイクロチップ / GM tube, Glass, Motor, Microchip

本作は科学技術の発展した現代において、人間が知覚出来ないエネルギーを扱うことをテーマにした作品です。この作品は、風鈴の起源とされる、邪気を捉えて払うために吊るされたといういわれをモチーフとしています。人の知覚外にある存在は、その性質ゆえに畏れという感情を喚起しますが、知覚できるものに（理屈上）転化することで、その畏れを克服しようとしました。しかし科学的に捉えられるエネルギーであることが分かった現在でも、緊張感をもって数値に臨むことが多いでしょう。この作品の根幹はリアルタイム・センシングです。世界各地で現在進行形である本テーマを、メタファーや痕跡を越え、実際の計測に基づき捉えようとしています。ガラスドーム越しに不規則に聞こえてくる鈴の静かな音に耳をすますと、世界との向き合い方についてあらためて考えるきっかけになるでしょう。

《Beachcombing with John and Friends》 2023 (2016-)
アバロス村野敦子 / Atsuko Murano ABALOS
写真集、アクリル２層 組写真、釣りの浮き（漂流物）、貝殻 / photo book, double layerd aclyric photo ojbect, fishing float(flotsam), sea shells

本作は写真集 Beachcombing With John を起点に縁側の家で生まれたインスタレーションです。北米太平洋側の漂着物には東日本大震災時に日本から流れてきたと認識されているものがあります。村野はそのことを知り、ワシントン州オリンピック半島で 40 年以上も浜に通う John を尋ねることになります。写真集はその現地の漂着物と John を訪う光景が収められています。阪神大震災での被災、そして東日本大震災をシンガポールで体験したことによる当事者性の意識を基に、昨年の縁側の家での体験を経て、写真集に幾つかのオブジェクトを加えた展開を試みています。日本の岩沢海岸と北米の海岸の写真を重ねたオブジェクト、そして添えられた beachcombing with friend と John が記した漂流物、岩沢海岸の貝殻を含め、「タイムマシーン」と語られた海の時間と繋がりを 2 つの浜から壮大に想起させてくれます。

《縁側の家のための詩 / Poem for engawanoie》 2023
小宮りさ麻里奈 / Marina Lisa KOMIYA
縁側の家、太陽、ソーラーパネル、LED / engawanoie, sun, solar panel, LED

縁側の家には皆が集まる庭があります。かつてからある柿の木や道具小屋に加えて、素敵なデザインの垣根にコンポストスペースやらピザ窯が手作りで加えられてきました。ここでくり返された日常や変化はどんなものだったのでしょうか？そしてこれからは？そんな庭に新たにソーラパネルが加えられました。陽の昇っている時だけ、そのエネルギーの源である太陽に呼びかける言葉が灯されます。小宮がエネルギーについて思考して導かれた４つの火についての語りが自立したシステムで実装されています。縁側の下でひっそりと流れてゆく文字はあたかもこの家自体が太陽について思いを馳せながら、大きな視座でエネルギーについて語っているようです。循環的に変化する、日の出日の入りのリズムに基づいて今日もその陽の光が映し出されています。

《umarekawaru》2023
パスカル ヴィウ / Pascal VIOUT
写真 / Photos

2016 年から福島の海とサーファーを撮影するプロジェクトを継続しているヴィウは、福島が umarekawaru 様子を、自然や人の持つ明るく力強いエネルギーと共に写真に収めたいと言います。本作は「3 月 11 日に波に乗ろう」の第 1 回開催をきっかけに、東京の SLOPE GALLERY で 2022 年に発表された連作のうちの２作品です。ひとつ目の作品では暗闇に浮かび上がる東京電力広野火力発電所の煙突とたなびく煙は遠くにあり、焦点が合わずにぼんやりと不気味な気配を漂わせますが、周囲の自然と調和し大きな人の営みを感じさせます。もうひとつの作品では、荒れた海の前に立つひとりの人物に焦点を明確に合わし、それによって、周囲の風景からくっきりとふち取られたその人物は、まるでその場所にとって付けられたようです。福島の海辺に立つ構造物と人物とをそれぞれの手法で捉え、その物語へと鑑賞者を誘う作品です。